

中国古代贈賻制度研究

劉, 可維

<https://doi.org/10.15017/1500461>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	劉可維			
論文名	中国古代贈賻制度研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	川本 芳昭
	副査	九州大学	教授	坂上 康俊
	副査	九州大学	准教授	中島 楽章
	副査	九州大学	講師	船田 善之

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、先秦時代より唐代に至る時期における贈賻（ボウフ）制度について、儒家經典、歴史文献資料を中心としながら、考古資料や最近発見された宋代の天聖令などをも精査し、中国古代における該制度の実態、歴史的意義を体系的に実証した論文である。

贈賻とは、官人死亡の際、官人の功績、位階などに準じて、官から本人および喪家へ賜った衣服、金銭などをいい、生前の位階や報償と同様、官人秩序の維持・強化の役割を果たしたものである。

第一章は、先秦時代における贈賻の実態を經典、近年の考古学の成果などに基づき考察したものである。

第二章は、前漢、後漢時代における贈賻の実態について考察したものであり、漢代の重臣・霍光の死に際する贈賻のあり方が、故事として以後の贈賻のあり方の範となったことを解明し、そこに故事から法的規範へと変容する端緒を見出している。

第三章は、西晋時代の贈賻の実態について考察したものであり、葬儀の際の故事が集成され、後世の律令における喪葬令と同質の性格をもってきたことを実証している。

第四章は、東晋南北朝における贈賻について考察したものであり、東晋南朝についてはそれが西晋のそれを踏襲したものであることを実証している。また、北朝については、北魏の時代に贈賻の制度が中国史上初めて、喪葬令として律令の中に規定されたことを解明している。

第五章は、唐代における贈賻の実態について唐喪葬令を中心として追究したもので、本論文中最も精細を極める章であり、これまでの歴史展開の中から完成された姿を示す唐代の制度の全体像を解明している。

本論文において高く評価される点は、第一に、これまで研究がないわけではなかったが、ほとんど単発的な、個別の研究に終始していた該研究を、初めて体系的、網羅的に、かつ贈賻を国家が死後も構成員を捕捉する手段としていたとの観点から解明した点、第二に、故事という慣行が徐々に規範化し、やがてそれが律令の中に取り込まれていく過程を西晋、北魏の時期に注目することを通じて考察し、そこに大きな転換点があることを初めて明らかにした点、第三に、文献資料にとどまらず広く考古学の成果にも目配りをし、また、近年発現した天聖令を十分に活用し新しい理解を導き出している点が上げられる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。